

アルツハイマー病患者に対する生活行為工程分析に基づいたリハビリテーション介入の標準化
に関する研究

研究代表者：田平 隆行 鹿児島大学医歯学域医学系 教授

研究要旨：

新オレンジプランにおける認知症リハビリテーションについては、1) 実際の生活場面、2) 有する認知機能等の能力を見極め、3) 最大限に活かす、4) ADL/IADL の自立と継続、を強調している。認知機能に伴う生活行為障害の特徴を分析し、具体的な障害工程や残存の特徴を捉えることは、最大限に活かすための介入の焦点化という観点から重要である。そこで、認知機能に関連した行為障害を具体的に提示可能な生活行為工程分析表（PADA-D）を開発し、各 ADL の障害と残存能力の特徴を示してきた。しかし、生活行為分析に基づいたリハビリテーション介入については事例報告に留まっていた。

平成 31 年度では、地域在住認知症者に対して生活行為分析に基づいたリハビリテーションを 3 か月間実施し、PADA-D の変化を 8 事例について個別的に検討した。

令和 2 年度には、地域在住アルツハイマー型認知症（AD）患者 49 名（うち対照群 24 名）に対して生活行為工程分析に基づいたリハビリテーションを 3 か月間介入し、その効果を PADA-D を用いて非ランダム化比較試験にて検証した。その結果、PADA-D 総合得点、Lawton ADL、下位項目では「洗濯」のみ有意な交互作用が認められ、介入効果が示された。目標として多かった「買い物」、「洗濯」等はそれぞれ介入ポイントに応じた部分的な工程の改善が見られた。また、介入群は目標とした生活行為（工程）の満足度、遂行度は向上し、主観的評価が得られた。

また、本研究では、「認知症の人の生活行為向上に資するリハビリテーションの手引き」を作成した。認知症の生活障害とリハビリテーションについてレビューし、これまでの認知症の ADL 評価を概観したうえで PADA-D の使用マニュアル、重症度ごとの特徴を示した。さらに、本研究での介入研究の成果を紹介し、その介入戦略を整理した。最後に、PADA-D を使用した介入事例を紹介して具体性を持たせた。

以上により、生活行為工程分析に基づいたリハビリテーション介入は、認知機能は変化せずとも ADL 自立度はわずかながら改善を示した。特に、目標とする生活行為については介入を焦点化した「工程」で改善する傾向を示した。従来の ADL 評価スケールは、介助量で段階付けされているため、この点は表出できず PADA-D の特徴が示されたと考える。地域在住の AD を中心とした認知症高齢者が在宅生活を継続するためにも ADL/IADL を詳細に分析し、目標指向的にリハビリテーションを実施する必要がある。また、目的に応じて残存している工程や認知機能の活用・代償、人的・物理的環境介入、反復練習等の介入戦略を選択し、かつ複合的な視点で介入することが重要と考える。

A. 研究目的

新オレンジプランにおける適切な認知症リハビリテーションについては、「実際に生活場面を念頭に置きつつ有する認知機能等の能力を見極め、これを最大限に活かしながら ADL や IADL を自立し継続できるよう推進する」とされている。軽度認知障害 (MCI) や軽度認知症 (MD) の生活行為は、多くの研究によって服薬管理、金銭管理などの複雑な IADL から障害されることが明らかになってきた。さらに認知機能の低下に伴い他の IADL、そして BADL の順に低下する。在宅での生活行為に対するリハビリテーション介入については、認知機能に伴う生活行為障害の特徴を分析し、障害されやすい工程、残存しやすい工程を明らかにし、遂行能力を最大限に活かす必要がある。我々が開発した生活行為工程分析表 (Process Analysis of Daily Activity for Dementia; PADA-D) は、認知機能の側面から工程分析した評価表であり、既存の ADL 評価尺度では把握できなかった工程での特徴や変化を捉えることが可能である。また、各生活行為を行為の過程に沿って起点と終点を定めているため一連の観察が行いやすく、認知機能に関連した行為障害を具体的に提示が可能である。これまで、PADA-D を用いて地域在住認知症者の各 IADL における重症度別の特徴を検討し、手続き的記憶を用いた工程が中等度者でも残存しやすいことを明らかにしてきた。しかし、生活行為分析に基づいたリハビリテーション介入については事例報告に留まっていた。

本研究では、地域在住 AD 患者に対して生活行為工程分析に基づいたリハビリテーションを 3 か月間介入し、その効果を PADA-D を用いて非ランダム化比較試験にて検証した。また、介入戦略を①残存している工程や認知機能の活用・代償、②反復技能練習、③物理的環境介入、④人的環境介入、⑤家族・介護者への支援教育の 5 つに分類し、整理した。

B. 研究方法

1. 研究デザイン

本研究では、介入施設ごとに特徴があることから非ランダム化比較試験を採用した。アウトカム評価は盲検化し、評価者と介入者は異なるセラピストとした。

2. 対象

対象は、地域に在住する 65 歳以上の AD 及び軽度認知障害 (MCI) 高齢者で、MMSE 得点は 10 点以上の者とした。除外基準は顕著な整形疾患、神経疾患、感覚器疾患等による生活行為障害が認められる者とした。リクルートは、全国 6 府県 (群馬、大阪、石川、熊本、鹿児島、沖縄) の認知症疾患医療センター、訪問看護ステーション、通所リハビリテーション及び通所介護事業所から抽出した。

3. 調査項目

基本情報は、性別、年齢、診断名、既往歴、居住形態、要介護度、主介護者、障害高齢者及び認知症高齢者の日常生活自立度、服薬状況である。主要アウトカム指標として PADA-D 総合得点 (Max210)、IADL 得点 (Max120)、BADL 得点 (Max90)、下位項目 (Max15)、PSMS、Lawton IADL、HADL、Mini-mental State Examination (MMSE) とした。PADA-D の評価方法は、リハ専門職等の自宅訪問による観察及び信頼ある家族からの聞き取りとした。副次アウトカム指標は、Zarit 介護負担尺度短縮版 (J-ZBI8)、認知症行動障害尺度 (DBD13) とし、介入群のみ目標設定した生活行為の満足度 (10 段階)、遂行度 (10 段階) であった。

4. 介入方法

介入は、PADA-D にて低下している工程及び残存している工程を明らかにし、本人・家族の合意のもと介入する生活行為を 3 行為まで選択する。具体的な目標を決定し、目標志向的に生活行為へのリハビリテーション介入を行う。介入は、1 回/週を基本とし、1 回 40 分、3 か月間、リハ専門職等が自宅を訪問して行うが、目標に応じた自宅以外の実施はこの限りではない。対照群は、研究協力者の施設で通常行っているプログラムおよび他のサービスのみを実施した。

5. 解析方法

ベースラインの 2 群間比較を尺度属性に応じて対応のない t 検定、 χ^2 検定を実施したのち、時間×群間の反復測定 2 元配置分散分析を実施した。また、介入群のみ目標とした PADA-D の各生活行為、満足度・遂行度の前後比較を Student の t 検定にて比較した。さらに、目標として多かった洗濯、買い物、服薬管理、移動の下位項目について前後比較を行った。(倫理面への配慮)

本研究では個人情報情報を消去し、すべて記号・数値に置き換え、個人が特定されないよう処理を行った。なお、UMIN 臨床試験の登録および鹿児島大学病院臨床研究倫理委員会の承認 (190024 倫-改 2) を得て実施した。

C. 研究結果

1. ベースラインの比較

対象者は、COVID-19 関連を含むドロップアウト 8 名、対象疾患外 3 名を除外して、最終的に介入群 25 名 (女性 16 名、76.2±9.1 歳)、対照群 24 名 (女性 15 名、78.5±6.4 歳) を分析対象とした。ベースラインでの 2 群間比較については、基礎的情報、認知機能、ADL、DBD13、Zarit8 全てにおいて有意差なく、同等の対象条件であった (表 1)。しかし、COVID-19 の影響による介入中に中断した者が 9 名 (中断期間 30-150 日) であった。

2. 介入前後比較 (2 元配置分散分析)

Lawton IADL ($F=4.32, P<0.05$), PADA-D 総合得点 ($F=3.98$) に有意な交互作用が見られ、介入効果が認められた。認知機能、行動心理症状、他 ADL 尺度には有意な変化なかった。(表 2)

3. PADA-D 下位項目の介入前後比較

目標とする介入が多かった洗濯、買い物、服薬管理、整容の介入前後の 2 群間比較を図 1 に示す。洗濯 ($F=3.32$) のみ有意な交互作用が認められた。

4. 目標とした生活行為と工程分析の介入前後比較

介入群 25 名の生活行為の目標数は合計 53 (1 事例当たり 2.12) であった。そのうち「洗濯」を目標とした者が 8 名、「移動・外出」7 名、「家事 (掃除など)」5 名、「買い物」、「調理」、「服薬管理」、「整容」4 名、「入浴」3 名の順で多かった。「洗濯」、「買い物」、「服薬管理」、「移動」の分析表介入前後比較を示す (図 2)。それぞれ介入ポイントに応じた部分的な工程の改善が見られた。

5. 目標とした生活行為の満足度と遂行度

各目標への満足度、遂行度 (各 10 段階) の前後比較を図 3 に示す。介入後、満足度、遂行度共に有意に向上し、目標指向的介入によって主観的な評価は高まることが確認された。

6. 介入戦略の割合と具体例

介入戦略は、①残存している工程や認知機能の活用・代償 45.8%、④人的環境介入 34.7%、②反復技能練習、物理的環境介入 30.5%、家族・介護者への支援教育 29.2%の順であった (表 3)

7. 認知症の人の生活行為向上に資するリハビリテーションの手引きの作成

認知症の生活行為に対する標準的なリハビリテーションについてまとめた。認知症の生活障害とリハビリテーションについてレビューし、これまでの認知症の ADL 評価を概観したうえで PADA-D の使用マニュアル、重症度ごとの特徴を示した。さらに、本研究での介入研究の成果を紹介し、その介入戦略を整理した。最後に、PADA-D を使用した介入事例を紹介して具体性を持たせた (別紙参照)。

D. 考察

ベースラインでは、年齢、性別、認知機能、BPSD、ADL において両群で差がなく、同程度の条件の参加者となった。介入前後では両群共に認知機能、介護負担感、BPSD、PSMS、HADL は著変なかったが、介護負担感、BPSD は低下傾向であった。唯一 Lawton IADL と PADA-D 総合得点が有意な交互作用を認め、対照群は悪化し、介入群は改善した。こ

のように認知機能が改善せずとも ADL は改善することが明らかとなり、ADL への直接的リハビリテーションの効果が示された。ADL 別でも両群で変化の相違はあるも有意な交互作用を示したのは洗濯のみであった。これは、目標とする生活行為は IADL が多く、特に 6 名が焦点にあてた洗濯に効果が表れたのかもしれない。図 2 に示すようにフックを工夫したり、取り込み忘れの工夫や反復練習によって「洗濯物を干す」、「洗濯物を取り込む、たたむ」工程で効果が得られた。その他も焦点を当て介入した工程で改善する傾向を示した。重要なことは、目標に対する満足度、遂行度は有意に向上したことである。PADA-D に反映しない部分においても主観的な満足度、遂行度が改善することで、自己効力感や有能感に繋がる可能性がある。このような肯定的な心理変化が行為の定着、習慣化のために必要である。また、介入戦略は、残存している工程や認知機能の活用・代償が最も割合が高かったが、多くは複合的に活用していた。従って、目的に応じて有する認知機能や残存能力を活かしつつ環境調整や反復練習等を含めた多角的な視点で介入することが重要と考えられる。

E. 結論

認知機能は変化せずとも ADL の総合点数はわずかながら改善する傾向を示した。特に、目標とする生活行為については介入を焦点化した「工程」で改善する傾向を示した。従来の ADL 評価スケールは、介助量で段階付けされているため、この点は表出できず、PADA-D の特徴が示されたと考える。また、目標とした生活行為 (工程) の満足度、遂行度は向上し、主観的評価は得られた。地域在住 AD 患者に対しては生活行為を分析し、直接的に ADL に介入することが効果的であった。しかし、COVID-19 の影響や重症度、居住環境、習慣性、性差等の交絡因子があるため、さらなる検証が必要である。

表1 介入前後のアウトカムの比較

	介入群 (N=25)	対照群 (N=24)	P 値
年齢	76.2±9.1	78.5±6.4	0.324 a
性別, 女性%	16(64)	15(63)	0.752 b
居住形態, 独居%	5(20)	5(22)	0.568 b
MMSE	19.5±5.9	19.3±4.9	0.863 a
DBD13 (Max52)	16.2±7.9	16.4±7.6	0.873 a
Zarit8 (Max32)	10.8±5.9	8.1±6.3	0.265 a
PSMS (Max6)	4.0±1.7	4.4±1.7	0.381 a
Lawton IADL (Max8)	3.6±2.3	3.6±2.6	0.927 a
HADL (Max100)	28.3±18.1	26.7±16.0	0.751 a
PADA-D 総合 (Max210)	131.1±36.0	127.4±39.4	0.73 a
BADL (Max90)	76.4±18.6	82.4±8.6	0.255 a
IADL (Max120)	54.7±30.4	45.0±33.4	0.291 a
COVID-19 中断期間	9名 (30-150日)		

a. 対応のない T 検定, b. χ^2 検定

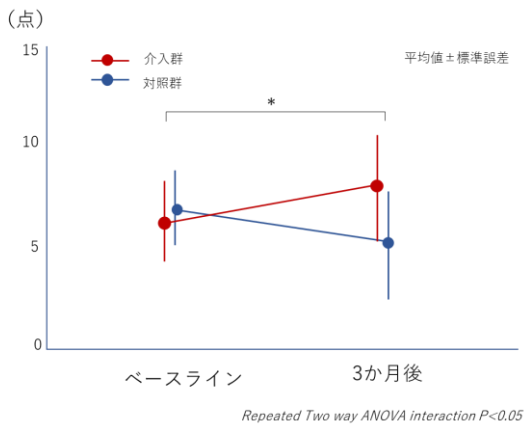
PADLP-D : Process Analysis of Daily Life Performance for Dementia, MMSE : Mini mental State Examination, PSMS : Physical Self-Maintenance Scale, Lawton IADL : Instrumental activity of daily living scale, HADLS : Hyogo Activity of Daily Living Scale, DBD13 : Dementia Behavior Disturbance Scale

表 2. 介入前後比較

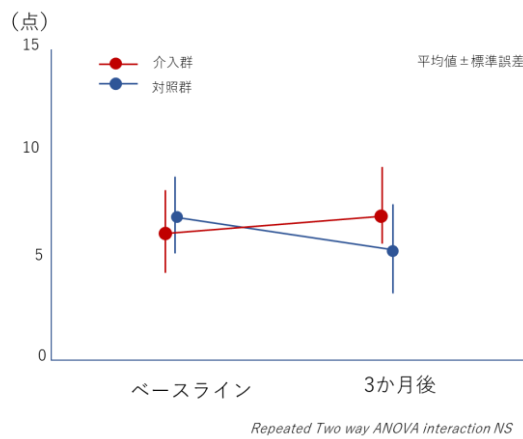
		介入群 (N=25)		対照群 (N=24)		交互作用
		ベースライン	3か月後	ベースライン	3か月後	F 値
MMSE	(Max30)	19.5±5.9	19.3±5.8	19.3±4.9	19.3±5.5	0.93
DBD13	(Max52)	16.2±7.9	15.3±8.7	16.4±7.6	17.6±6.8	0.83
Zarit8	(Max32)	10.3±5.9	9.7±6.8	8.1±6.3	7.6±5.9	0.96
PSMS	(Max6)	4.2±1.7	4.3±1.4	4.4±1.7	4.6±1.5	0.27
Lawton IADL	(Max8)	3.6±2.3	3.9±2.3	3.6±2.6	3.2±2.7	4.12*
HADL	(Max100)	28.3±18.1	27.4±15.8	26.7±16.0	29.0±17.1	1.92
PADA-D 総合	(Max210)	131.1±36.0	135.6±36.6	127.4±39.4	122.5±41.9	3.92*
BADL	(Max90)	76.4±18.6	81.6±8.3	82.4±8.6	82.5±7.9	2.78
IADL	(Max120)	54.7±30.4	58.8±31.5	45.0±33.4	42.29±33.4	2.61

反復測定のある二元配置分散分析 *P<0.05

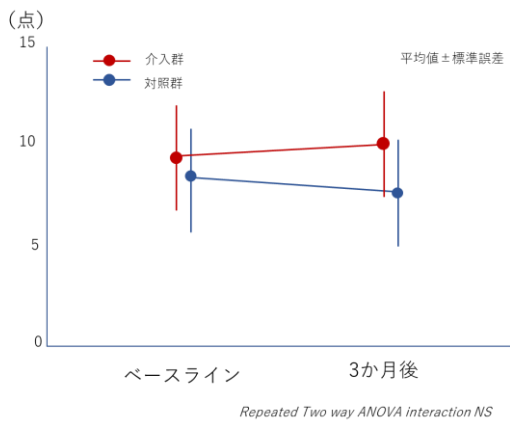
1) 洗濯



2) 服薬管理



3) 買い物



4) 整容

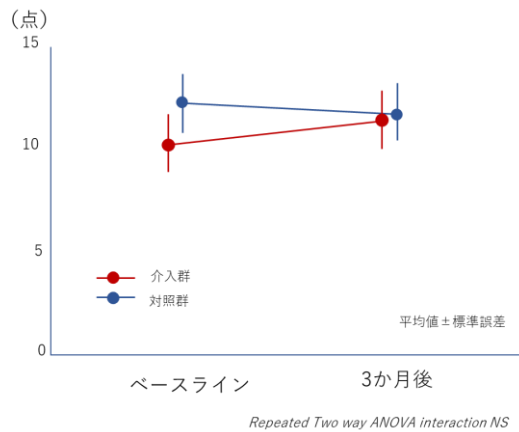
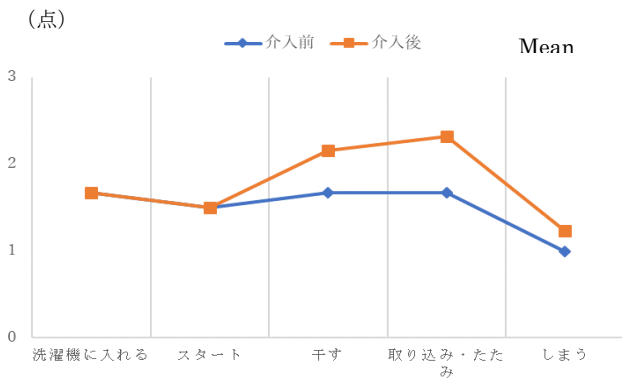


図 1. PADA-D 下位項目の介入前後比較

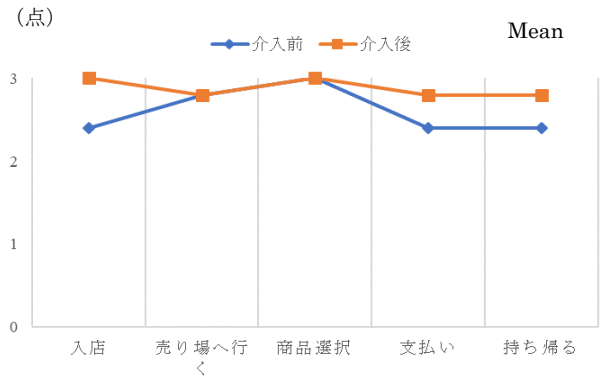
1) 目標に「洗濯」がある (N=8)



事例 1) 82 歳, 女性, 同居, MMSE22
 目標・介入: 「干す」
 物干しが高いため S 字フックを購入・活用
 戦略: ③物的環境介入

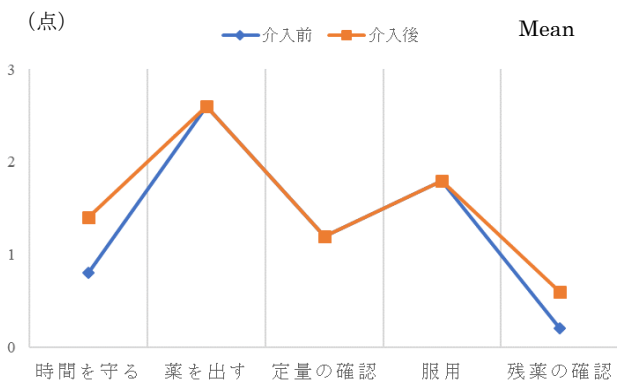
事例 2) 70 歳, 男性, MMSE25
 目標・介入:
 「洗濯機から服を取り出す」「干す」「取り入れる」
 の張り紙, しわ伸ばし, 取り組み時間の声掛け
 戦略: ②反復練習, ③物的環境介入

2) 目標に「買い物」がある (N=4)



事例) 83 歳, 女性, 同居, MMSE23
 目標・介入: 「入店」「売り場へ行く」「商品選択」
 店で買いたい商品を想起し, 探し出す
 手段: ①残存工程や認知機能の活用
 ④人的環境介入
 満足度: 7→10/10, 遂行度 7→7/10

3) 目標に「服薬管理」がある (N=4)



事例) 83 歳, 女性, 同居, MMSE23
 目標・介入: 「入店」「売り場へ行く」「商品選択」
 店で買いたい商品を想起し, 探し出す
 手段: ①残存工程や認知機能の活用
 ④人的環境介入
 満足度: 7→10/10, 遂行度 7→7/10

4) 目標に「移動」がある (N=7)

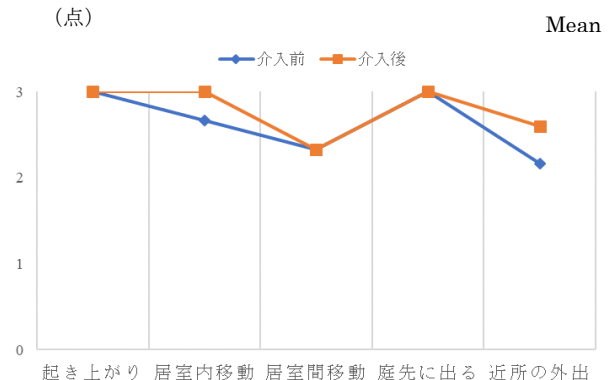


図 2. 目標とした生活行為の工程分析の介入前後比較例

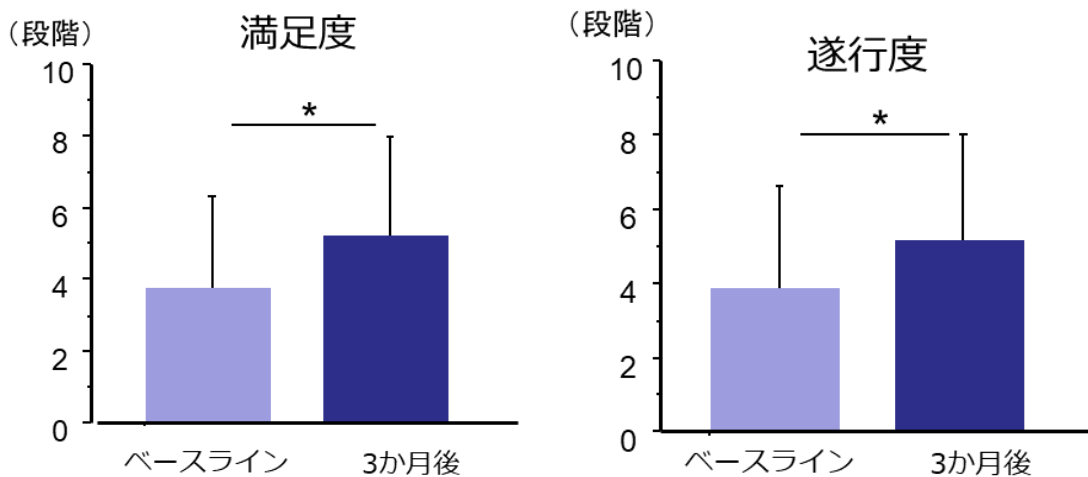


図3. 介入群の満足度・遂行度の前後比較 (N=25, 目標数 47, 欠損値 6)
Mean±SD, Non Paired T test *P<0.01

表3. 生活行為工程分析に基づいたリハビリテーション介入の介入戦略

介入戦略	%
1 残存している工程や認知機能の活用・代償	45.8
2 反復技能練習	30.5
3 物理的環境介入	30.5
4 人的環境介入	34.7
5 家族・介護者への支援教育	29.2
6 その他	5

介入群 25 名, 合計目標数 70, 合計戦略数 123

分担研究者 池田学担当分の研究についての目的, 方法, 結果, 結論を以下に記す.

平成 31 年度

生活行為工程分析表 (PADA-D) による意味性認知症患者の ADL 評価と課題

目的: 若年性認知症の代表的疾患の一つである意味性認知症 (semantic dementia : SD) の ADL 障害は、その疾患特性である意味記憶の障害や行動障害による影響が考えられるため、詳細な ADL 行為の変化を定量的に把握することは難しい。そこで、SD 患者に対して ADL 行為・工程に沿った評価を行うことが可能な生活行為工程分析表 (PADA-D) を用いて、どのような ADL 行為工程が障害されるかを明らかにする。

対象: 2014 年 4 月～2019 年 11 月の間に大阪大学医学部附属病院神経科精神科神経心理専門外来を初診し、通院中の SD 患者 8 名とその家族介護者。

方法: 初診後、作業療法士が SD 患者の自宅を訪問し、PADA-D を用いて主介護者へ直接対面による半構造化面接を行い、日常生活動作の評価を行った。
結果: Basic ADL は概ね自立していたが、Basic ADL・IADL 項目とも「行為の質」に低下が認められた。また、「金銭管理」など使用する道具や手段が複雑な行為になるほど、自立は困難であった。

まとめ: SD 患者の ADL 障害は病初期においてある程度自立を示したが、「行為の質」までを評価するには PADA-D では困難であった。今後は「行為の質」も含めて SD の疾患特性が反映される生活行為工程分析表の検討が求められる。

令和 2 年度

COVID-19 下における若年性認知症者を対象とした Web 会議システム (Zoom) による生活指導・支援システム (+o-management) の構築と介入事例の報告

目的: 介護サービス利用に至らない若年性認知症者への訪問生活指導は在宅生活の維持に必要な介入だが、COVID-19 感染拡大以降、十分に施行されにく

い状況にある。一方、通信機器を使用した Web 会議システム(Zoom)は新たな対人交流手段として日常生活に浸透している。人の移動や接触を伴わない非接触型の利点を患者の生活評価や指導に導入することは、在宅生活支援においてもその有用性が期待できる。

対象：2020年8月の時点で大阪大学医学部附属病院精神科神経心理専門外来に通院しており、若年性認知症と診断されているが訪問サービスを利用していない患者とその家族介護者。

方法：患者と病院を Zoom で接続し、画面越しに患者や主介護者へ PADA-D などの生活評価スケールを用いて半構造化面接を行う。課題抽出後に介入内容を決定し、週 1 回 Zoom による生活指導を約 3 ヶ月間行う。

結果：Zoom による ADL 聞き取り評価は時間を要するが、対象者や介護者から得られる生活情報は十分収集可能であった。また、生活課題から導出された ADL 動作指導や外出などの介入は、対象者と接触できる第三者の協力が必要となったが、地域支援者に情報提供を行うことで作業療法士と患者間の生活支援に完結されず、Zoom 介入と地域支援者介入が融合したハイブリッド支援となった。

まとめ：Zoom を介した生活指導は、生活背景や疾病特徴が多様な若年性認知症者において個別性が高い生活支援が可能であった。+o-management は COVID-19 終息以降も、訪問に代わる遠隔地へのオンラインリハビリテーションなどに発展が望める生活支援システムと成り得る。

分担研究者 粟田主一担当分の研究についての目的、方法、結果、結論を以下に記す。

平成 31 年度

生活行為工程分析表 (PADA-D) を用いた認知症及び軽度認知障害者の IADL の特徴

目的：地域在住の認知症及び軽度認知症 (MCI) 者の IADL の特徴について生活行為工程分析表 (PADA-D) を用いて重症度別に比較検討する。

方法：A 県 B 病院の認知症疾患医療センター及び C 県 D 通所介護事業所を利用している認知症および MCI と診断されている 25 名を認知機能低下軽度群 (MMSE20 以上)、中等度群 (19-11) に分類し、PADA-D の各 IADL 自立度について工程別に比較検討した。

結果：買い物は中等度群において「商品選び」や「支払い」が低く、電話は中等度群において「電話をかける」、「かけた相手と話す」が顕著に低かった。調理は、両群共に「献立」、「調味」が低く、「加工」、

「配膳」が高い傾向にあった。家事では「食事の後片づけ」は保たれやすく、「生活用品の管理」、「寝具管理」が顕著に低下した。洗濯は「洗濯物を干す」が中等度群でも維持されやすく、金銭管理では「現金の扱い」が最も高かった。

まとめ：地理的条件や家族などの環境要因、生活習慣性などの個人因子などの影響は否めないが、認知機能の低下に伴い IADL 自立度は低下し、特に「管理」や「選択」、遂行中の「確認」が必要な工程で低下しやすい傾向であった。一方、手続き的記憶を活かしやすい工程は残存する傾向であった。

令和 2 年度

地域在住認知症患者の生活行為に資するリハビリテーション介入戦略の整理と実際

目的：生活行為障害に対する介入戦略を具体的に整理し、総括報告書における非ランダム化比較試験における介入戦略の具体例を示す。

方法：先行研究を参考に①残存している工程や認知機能の活用・代償、②反復技能練習、③物理的環境介入、④人的環境介入、⑤家族・介護者への支援教育の 5 つに分類した。生活行為工程分析に基づいたリハビリテーション介入を実施した介入群 25 名の介入戦略の割合を算出し、具体例を示した。

結果：介入戦略は、①残存している工程や認知機能の活用・代償 45.8%、④人的環境介入 34.7%、②反復技能練習、物理的環境介入 30.5%、家族・介護者への支援教育 29.2%であった。しかし、多くの場合これらを複合的に活用していた。

結論：有する認知機能や残存能力を活かし、環境調整や反復練習等を含めた複合的な視点で介入することが重要である。

分担研究者 牧迫飛雄馬担当分の研究についての目的、方法、結果、結論を以下に記す。

平成 31 年度

高齢者の認知機能と生活活動および生活行為能力に関する文献レビュー I

本研究では、高齢者における認知機能レベルと日常での生活活動および生活行為の自立に関する先行研究を探索的に調べた。認知機能レベルは、健常、軽度認知障害 (mild cognitive impairment: MCI) に分類し、MCI に関してはタイプ分類 (健忘型もしくは非健忘型) の記述のある文献については、タイプごとに生活活動・生活行為の自立度を調べた。生活活動・生活行為の自立度に関しては、「外出・活動」、「家庭内での家事」、「道具の利用等」、「管理 (マネージメント)」、「コミュニケーション」、「複雑な行動・活

動」、「理解や記憶」、「基本的日常生活活動」に分類した。MCI 高齢者においては、家庭内での家事動作は概ね自立しており、身だしなみや身体衛生などのセルフケアが障害されることは少なかった。一方、複雑な認知能力が要求される行為や管理や環境適応などの高次な認知能力が求められる行動ではMCIで遂行の困難さが生じ、公共交通機関の利用や自動車の運転を伴うような外出行動では制限が生じていた。

令和 2 年度

高齢者の認知機能と生活活動および生活行為能力に関する文献レビュー II

MCI 高齢者およびMCIのリスクを有する高齢者においては、認知機能の状態が IADL 能力に影響する。本研究では、高齢期における IADL 能力の維持・向上のための対策を講じるうえでの視点を提示することを目的に、軽度認知障害 (mild cognitive impairment: MCI) を有する高齢者およびMCIのハイリスク高齢者を想定して、IADL に影響を及ぼす認知機能以外の要因についての文献レビューを探索的に行った。IADL に影響を及ぼす認知機能以外の要因として、13 の潜在的な関連要因を抽出された。抽出された 13 の認知機能以外で IADL 能力と関連する要因について、その類似性から「運動機能に関する要因」、「身体構造・機能に関する要因」、「精神・心理的な要因」、「社会的要因」、「個人要因」といった側面に含まれる潜在的な要因が抽出された。

分担研究者 山口智晴担当分の研究についての目的、方法、結果、結論を以下に記す。

平成 31 年度

認知症初期集中支援チーム対象者における生活行為の課題分析に向けた予備検討

目的: 初期~中期のアルツハイマー型認知症(AD)の人が在宅生活の継続に向けて課題となる IADL について、世帯構成と性別による影響も踏まえて傾向を把握する。

方法: A 市認知症初期集中支援チーム対象者のうち、アルツハイマー型認知症と診断された 19 名について、支援依頼票とチーム員の会議録を調査。在宅生活の継続において課題となっている IADL 項目を確認し、世帯構成と性別による違いを検討した。

結果: 世帯別にみると独居では、金銭管理や調理、電話、買い物、服薬管理が在宅生活継続における課題にあげられることが多かった。特に、他の世帯と比して、調理や金銭管理が課題となる割合が高かった。夫婦のみ世帯では服薬管理と金銭管理、買い物、外出が課題となる割合が高く、特に服薬管理は他の

世帯と比してその割合が高かった。性別による検討では、女性において調理や電話、買い物で明らかに男性と比して課題となる割合が高かった。一方で、男性は外出の中でも特に自動車運転に関するトラブルの割合が突出して高かった。

まとめ: 独居世帯では他の世帯構成と比して、リスク管理や栄養確保などの生命と生活の維持管理に重要な項目が課題となる傾向にあった。夫婦のみ世帯やその他の世帯では、同居者が調理や家事などをサポートしており、在宅生活の継続における課題とはされにくい傾向があった。一方で性別による違いでは、明らかに女性で IADL 全般に課題とされる割合が高く、特に調理や買い物、電話などは男性との差が大きかった。

令和 2 年度

認知症初期集中支援チーム対象者における介護負担感改善要因の検討

目的: 認知症の人の穏やかな在宅生活の継続に向け、介護家族の介護負担感の改善がどの因子と関連するか、認知症初期集中支援チームの対象者で検討する。
方法: A 市認知症初期集中支援チームの過去 2 年間の支援対象者のうち、情報が得られた 24 名に対し、介入前後で短縮版 Zarit 介護負担尺度日本語版 (J-ZBI_8) が改善した群と悪化した群に分け、基本属性や終了時主効果、各スケールとの関連性を検討した。

結果: J-ZBI_8 改善群と悪化群において基本属性や主効果、支援期間等には明らかな差は認めなかったが、悪化群は支援期間が長く訪問回数が多い傾向にあった。改善群は悪化群に対し、明らかな Dementia Behavior Disturbance Scale (DBD) 短縮版 (DBD-13) の改善を認めたが、地域包括ケアシステムにおける認知症アセスメント DASC-21 では統計学的有意差は認めなかった。また、介入前後における J-ZBI_8 と DBD-13 の点数変化には関連性を認めた。

まとめ: 認知症初期集中支援チームの介入で介護負担の軽減につながったケースは、精神症状や行動症状の軽減が大きく影響している傾向を認めた。

分担研究者 友利幸之介担当分の研究についての目的、方法、結果、結論を以下に記す。

平成 31 年度

生活行為レベルの目標設定可否の割合とその要因に関する検討

本研究の目的は、認知機能障害を有する高齢者を対象に、生活行為レベルの目標設定が可能/不可な割合を求めると、その可否に影響する要因について

検討することである。対象は、一般病棟・地域包括ケア病棟の入院患者のうち、65歳以上、Mini Mental State Examination (MMSE)が23点未満の33名で、目標設定には作業選択意思決定支援ソフト(ADOC)を用いた。1回目の目標設定は6名(18%)が可能、27名(82%)が不可であったが、27名のうち15名(45%)は途中で可能となった。影響する主な要因は、生活行為レベルの介入を導入できたかどうかであった。つまり、認知機能障害を有する高齢者においては、最初目標設定が出来なくとも、生活行為レベルの介入を導入するなかで可能となる可能性が示唆された。

令和2年度

認知機能障害を有する高齢者における生活行為レベルの目標設定可否の割合とその要因に関する検討

本研究では、認知症者の目標設定について、既存の知見を整理する目的でスコーピングレビューを実施した。データベース検索の結果、全1021編を得た。重複論文の除外と、タイトル・本文の読み込みを行い、最終的に適格基準に合致した研究33編を読み込み対象として採用した。目標設定に介入も含まれている報告が22編(60.6%)で、そのうちランダム化比較試験が10編だった。介入に用いられていた目標設定を含むフレームワークとしては Cognitive Rehabilitation が最も多く、目標設定のツールとしてカナダ作業遂行測定、Goal-Attainment Scaling, Bangor Goal-Setting Interview があった。いずれも認知症者の生活における意味のある活動に焦点をあてた目標設定が行われていた。目標設定に関するフレームワークやツール等の開発は進んでいるようだが、重度認知症者に対応したものは少なかった。今後、重度認知症者を対象とした研究が望まれる。

分担研究者 田中寛之担当分の研究についての目的、方法、結果、結論を以下に記す。

平成31年度

在宅AD患者を対象に生活行為工程分析表を用いたリハビリテーション介入効果の検証
およびAD患者の生活行為に対するリハビリテーション介入に関する文献レビュー

本研究では、在宅アルツハイマー型認知症患者(Alzheimer's Disease; AD)に対する生活行為工程分析表を用いた介入の事例の経過を報告するとともに、AD患者の生活行為に対するリハビリテーション介入に関する先行研究を探索的に調べた。事例については、現在2事例に対して介入終了・途中であり、1事例目は施設に入所されたため中断し、2事例目は生活行為の改善が認められており、順調に経過してい

る。介入についての受け入れが良好な家族であり、かつ併存疾患の急性増悪などが認められないAD患者であれば、一定の生活行為の改善を認める可能性は十分にあることが想定できた。

AD患者に対する生活行為の工程分析に基づく介入手法については、次の介入戦略に分類できる。①残存している工程や認知機能の活用・代償、②反復技能練習、③物理的・人的環境介入、④家族・介護者への支援教育である。これまでの先行研究では、これらのいずれかを中心に使った手法を用いており、いずれもADLに対しては有効な効果を示している。しかし、これらの手法は重症度によって優先度が異なり、軽度段階であれば①残存している工程や認知機能の活用・代償、②反復技能練習が中心に行われ、中等度以降に進行すれば、③物理的・人的環境介入、④家族・介護者への支援教育、の割合が増加する。

令和2年度

生活行為工程分析表を用いた介入の実践 -アルツハイマー型認知症の一事例-

本報告書では、生活行為工程分析表を用いたリハビリテーション介入の効果を事例を通して具体的に示すこと、過去の先行研究をレビューし本研究で用いた介入戦略の有用性を考察することである。

これまで、生活行為に対する介入戦略として、対象者、家族と共有された活動・参加レベルの個別化された目標に対し、残存している工程や認知機能の活用・代償、反復技能練習、物理的・人的環境介入、家族・介護者への支援教育のいずれかもしくはそれぞれを組み合わせたものが改善効果を示している。

今回の研究において、3事例同意を得たが2例がCOVID-19の感染拡大の影響のため中断したため、アルツハイマー型認知症(Alzheimer's Disease; AD)の80歳代女性1例について報告する。初期評価として、生活行為工程分析表(Process Analysis of Daily Activity for Dementia ; PADAD)の結果をもとに本人・家族とともに生活行為について面接を行い、改善目標として「移動」「買い物」「電話」が挙げられた。週に1回、40分/回、3ヶ月間介入した結果、これら3つの生活行為の能力が改善、主介護者の介護負担感の軽減が認められた。介入終了後3ヶ月後も効果が持続した。

これまでの認知症者に対する非薬物的介入に対しては改善効果が限定的であった。本研究で実施した生活行為工程分析表を用いた目標指向的な介入戦略は、介入プロセスを具体化できる再現性の高いものであると思われる。認知症者の生活行為障害に対する有効な手法である。

分担研究者 吉浦和宏担当分の研究についての目的、方法、結果、結論を以下に記す。

平成 31 年度

アルツハイマー病患者における独居/同居別の日常生活能力の差

目的：アルツハイマー病(AD)患者を対象に、世帯構成によって日常生活能力評価の結果に差があるか検討を行った。

方法：熊本大学病院神経精神科の認知症専門外来にて AD と臨床診断された 684 例を対象に、独居と同居の 2 群に分け、日常生活能力の差を比較した。

結果：日常生活能力指標の比較は、年齢・教育年数・うつ・認知機能を調整して解析し、女性 AD は独居群が同居群に比べ Lawton Instrumental Activities of Daily Living Scale (IADL) スコアが有意に高かった。

まとめ：女性 AD は独居群のほうが同居群に比べ、手段的日常生活能力が高い可能性がある。IADL は介護者や家族から情報を得る評価であるため、独居者の能力を適切に評価できていない可能性がある。したがって日常生活動作の実行能力を詳細に評価する生活行為工程分析表 (PADA-D) などを用いた調査が期待される。

令和 2 年度

Alzheimer 病患者における日常生活能力維持に関する世帯構成の影響：縦断的研究

目的：近年、独居高齢者が増加傾向にあるが、Alzheimer 病患者の日常生活能力の維持について、世帯構成の影響は調べられていない。日常生活能力の維持と、独居か同居の世帯構成の関係を調べ、Alzheimer 病患者の地域生活の支援策を検討する。

方法：AD と臨床診断された 110 例を対象に、初診時と 1 年後の臨床データを用いて、日常生活能力維持に関連する要因について、世帯構成含む対象者の特性を独立変数に加えてロジスティック回帰分析を行った。

結果：日常生活能力の維持には、世帯構成 ($\beta=1.80$, $p=0.031$) と認知機能 ($\beta=0.13$, $p=0.010$) に有意な関連を認めた。

考察：世帯構成は、Alzheimer 病患者の日常生活能力の維持に関連していた。Alzheimer 病患者の地域生活維持のためには、認知機能や人的環境も含めた多面的な支援が必要であると考えられる。

分担研究者 Han Gwanghee 担当分の研究についての目的、方法、結果、結論を以下に記す。

平成 31 年度

アルツハイマー病患者における日常生活活動と Mini-Mental State Examination 下位項目のパフォーマンスとの関係

目的：Mini-Mental State Examination (MMSE) 下位項目は、それぞれ異なる認知機能を評価しており、アルツハイマー病 (AD) 患者の認知機能の状態に関する有用な情報を提供する。MMSE 下位項目と日常生活動作 (ADL) との関係を示すことができれば、下位項目のパフォーマンスから ADL の状態を予測でき、早期の ADL 介入に役立つ情報となる。そのため、本研究は MMSE 下位項目と ADL の関係を調査することを目的とした。

方法：熊本大学神経精神科の AD 患者 718 人を対象に、MMSE、基本的 ADL を評価する Physical Self-maintenance Scale (PSMS)、手段的 ADL を評価する Lawton's Instrumental ADL (L-IADL) を実施し、PSMS 及び L-IADL の各小項目を従属変数、MMSE 下位項目を独立変数としてロジスティクス回帰分析を実行した。

結果：PSMS の各項目に強く関連する MMSE 下位項目のオッズ比 (OR) は異なった (排泄：「記銘」OR 3.00、身繕い：「命名」OR 3.66 など)。L-IADL の場合、ほとんどの小項目は「書字」に強く関連しており (買い物：「書字」OR 4.29、洗濯：「書字」OR 3.83 など)、移動・外出は「模写」(OR 2.81)、服薬の管理は「時価見当識」(OR 1.93) と強い関連が示された。

まとめ：本研究により、ADL の内容によって関連する MMSE 下位項目が異なることを確認できた。MMSE は、AD 患者の初診から使われることが多く、この調査で得られた知見は、AD 患者の MMSE 下位項目のパフォーマンスから ADL 状態を予測でき、よりの確な早期介入のため、有用な情報として活用できると思われる。

令和 2 年度

アルツハイマー病患者における生活行為障害と行動心理症状の関連についての検討

目的：アルツハイマー病 (AD) では記憶障害など中核症状に加え、行動・心理症状 (BPSD) がみられるが、BPSD のどのような症状が基本的 ADL (BADL) 及び手段的 ADL (IADL) に関連しているのかを調べた研究はない。そのため、本研究は BPSD の各々の症状と ADL との関連を調べることを目的に実施した。

方法：熊本大学病院神経精神科の AD 患者 629 名 (77.3±8.5 歳、MMSE 平均 19.7±5.0 点) を対象に、行動・心理症状評価の Neuropsychiatric Inventory caregiver Distress scale (NPI-D) と、BADL 評価の Physical Self maintenance Scale (PSMS)、IADL 評価の

Lawton's Instrumental ADL(L-IADL)を実施した。解析方法は、まずNPI-Dの各下位項目の得点とPSMS及びL-IADLの各下位項目別の点数との相関関係をSpearmanの順位相関係数にて検討した。次にPSMS及びL-IADLの各下位項目を従属変数とし、Spearmanの順位相関係数において有意な相関関係を認めたNPI-D下位項目を独立変数に投入し重回帰分析を行った。

結果：Spearmanの順位相関係数の結果、主に幻覚、無為、異常行動がPSMS及びL-IADLの各下位項目と有意な関連を示した。重回帰分析の結果、PSMSの排泄、食事、移動能力、入浴は幻覚の関連が最も高かった。L-IADLの電話使用、買い物、食事支度、家事、移動外出、服薬管理は無為の関連が最も高値であった。

まとめ：本研究では、BPSDの内BADLでは幻覚との関連が多くみられ、IADLの殆どは無為との関連が示唆され、BADLとIADLで影響されるBPSDは違うことが推察された。ADのADL低下には様々な原因が想定されるが、BPSDの内容によって影響されるADLが異なることを踏まえながら介入していく必要があると考えられた。

分担研究者 吉満孝二担当分の研究についての目的、方法、結果、結論を以下に記す。

平成31年度

アルツハイマー型認知症高齢者の作業活動中の経時的情動変化に関する研究

本研究では認知症対応型デイサービスに通うアルツハイマー型認知症の女性の作業活動場面（自由時間、タオルたたみ、食器拭き）を録画し、P. EkmanらのFacial Action Coding SystemとDeep Neural Networks, Deep Learning技術をベースとした表情解析ソフトFaceReader®を用いて表情解析を行った。その結果、タオルたたみの作業活動で幸せの表情（平均値）と快の感情価（平均値）が強く出現し、職員による指導と称賛の場面でともに最大値となった。一方で悲しみと不快が強く出現したのは自由時間で、悲しみの最大値はバイタル測定時に、不快の最大値は自由時間終了間際に見られた。これらは動画内の各エピソードで説明でき、表情解析ソフトを用いて作業活動中の対象者の情動変化を経時的解析することの可能性と有用性を示すことができた。

令和2年度

単身世帯の地域在住認知症患者の生活行為分析表(PADA-D)の特徴

目的：本研究では、地域在住認知症高齢者のIADLについて生活行為工程分析表(PADA-D)を用いて調べ、独居高齢者の具体的な障害と残存能力を検証する。

方法：対象は、地域在住する認知症高齢者52名の内、女性のみアルツハイマー型認知症患者38名とした。独居群は11名（平均年齢85.9±7.1歳）、同居群は27名（平均年齢84.6±7.5歳）に対してPADA-Dの総合、IADL得点を2群間で比較した。さらに各IADLを工程ごとに自立割合（3点満点）を算出し、2群間で比較した。

結果：独居者は同居群と比較し、PADLP-Dの総合得点等には差はないが、生活行為別や工程では相違がみられた。1) IADLは「電話」が高く「調理」が低い、2) 調理：「配膳」は高く、「献立」は低い、3) 電話：「かける」、「かけた相手と話す」は高い、4) 洗濯：「干す」、「取り込む」が低い、5) 服薬管理：「決まった袋を出す」、「定量を確認する」が高い、6) 金銭管理：「現金の扱い」は高い傾向であった。

結論：独居の認知症高齢者のIADL自立度が高い部分は、各ADLの工程で異なっており、生活行為全体が高いのではない。独居者の得意な工程を継続させることが重要であり、そのためにもPADA-Dのように詳細なADLの観察・聴取が必要である。

F. 健康危険情報

特記すべきことなし

F. 研究発表

1. 論文発表

・Tabira T, Hotta M, Murata M, Yoshiura K, Han G, Ishikawa T, Koyama A, Ogawa N, Maruta M, Ikeda Y, Mori T, Yoshida T, Hashimoto M, Ikeda M: Age-Related Changes in Instrumental and Basic Activities of Daily Living Impairment in Older Adults with Very Mild Alzheimer's Disease. *Dement Geriatr Cogn Disord Extra*,0:27-37,2020. doi: 10.1159/000506281

・Maruta M, Tabira T, Sagari A, Miyata H, Yoshimitsu K, Han G, Yoshiura K, Matsuo T, Kawagoe M, Impact of sensory impairments on dementia incidence and symptoms among Japanese older adults. *Psychogeriatrics*,2019. doi:10.1111/psyg.12494,

・Ikeda Y, Ogawa N, Yoshiura K, Han G, Maruta M, Hotta M, Tabira T: Instrumental Activities of Daily Living: The Processes Involved in and Performance of These Activities by Japanese Community-Dwelling Older Adults with Subjective Memory Complaints. *Int J Environ Res Public Health*. 2019. doi:10.3390/ijerph16142617

- Maruta, M, Makizako, H, Ikeda, Y, Miyata, H, Nakamura, A, Han, G, Shimokihara, S, Tokuda, K.; Kubozono, T, Ohishi, M, Tomori, K, Tabira, T. Associations between Depressive Symptoms and Satisfaction with Meaningful Activities in Community-Dwelling Japanese Older Adults. *J. Clin. Med.* 9, 795. 2020.
- Maruta M, Tabira T, Makizako H, Sagari A, Miyata H, Yoshimitsu K, Han G, Yoshiura K, Kawagoe M: Impact of Outpatient Rehabilitation Service in Preventing the Deterioration of the Care-Needs Level Among Japanese Older Adults Availing Long-Term Care Insurance: A Propensity Score Matched Retrospective Study. *Int J Environ Res Public Health.* doi: 10.3390/ijerph16071292, 2019
- 田平隆行, 堀田牧, 小川敬之, 村田美希, 吉浦和宏, 丸田道雄, 池田由里子, 石川智久, 池田学: 地域在住認知症患者に対する生活行為工程分析表 (PADA-D) の開発. *老年精神医学雑誌* 30(8) :923-930, 2019
- 田平隆行, 堀田牧: 地域で継続して生活するために在宅での生活行為に対する評価と介入ポイント. *作業療法ジャーナル* 53 (10) : 1153-1157, 2019
- 丸田道雄, 田平隆行, 川越雅弘: 地域で継続して生活するために介護認定調査から見た認知症者の ADL・BPSD の実態と介入. *作業療法ジャーナル* 53 (10) : 1135-1140, 2019
- 下木原俊, 丸田道雄, 吉満孝二, 徳田圭一郎, 上城憲司, 西田征治, 磯直樹, 内田淳, 福永一喜, 椿野由佳, 村島久美子, 河合晶子, 田平隆行: 医療・介護施設における徘徊行動とその支援についての実態調査. *日本作業療法研究学会雑誌*, 23(1): 9-16, 2020
- 韓侑熙, 丸田道雄, 高橋弘樹, 中村篤, 宮田浩紀, 竹林実, 松尾崇史, 田平隆行: 脳血管障害患者の情報処理型による表情識別能力の相違および認知機能評価との関連性. *日本作業療法研究学会雑誌*, 23 (1) : 17-23, 2020
- Watanabe H, Ikeda M, Mori E. Primary Progressive Aphasia as a Prodromal State of Dementia With Lewy Bodies: A Case Report. *Front Neurol.*18;11:49,2020 Feb doi: .3389/fneur.2020.00049. eCollection 2020.
- Ducharme S, Dols A, Laforce R, Devenney E, Kumfor F, van den Stock J, Dallaire-Théroux C, Seelaar H, Gossink F, Vijverberg E, Huey E, Vandenbulcke M, Masellis M, Trieu C, Onyike C, Caramelli P, de Souza LC, Santillo A, Waldö ML, Landin-Romero R, Piguët O, Kelso W, Eratne D, Velakoulis D, Ikeda M, Perry D, Pressman P, Boeve B, Vandenberghe R, Mendez M, Azuar C, Levy R, Le Ber I, Baez S, Lerner A, Ellayosyula R, Pasquier F, Galimberti D, Scarpini E, van Swieten J, Hornberger M, Rosen H, Hodges J, Diehl-Schmid J, Pijnenburg Y. Recommendations to distinguish behavioural variant frontotemporal dementia from psychiatric disorders. *Brain.* pii: awaa018, 2020 Mar 4 doi: 10.1093/brain/awaa018.
- Kudo N, Yamamori H, Ishima T, Nemoto K, Yasuda Y, Fujimoto M, Azechi H, Niitsu T, Numata S, Ikeda M, Iyo M, Ohmori T, Fukunaga M, Watanabe Y, Hashimoto K, Hashimoto R. Plasma levels of matrix metalloproteinase-9 (MMP-9) are associated with cognitive performance in patients with schizophrenia. *Neuropsychopharmacol Rep*, 2020 Feb 5 doi: 10.1002/npr2.12098.
- Shiino T, Miura K, Fujimoto M, Kudo N, Yamamori H, Yasuda Y, Ikeda M, Hashimoto R. Comparison of eye movements in schizophrenia and autism spectrum disorder. *Neuropsychopharmacol Rep.*40(1):92-95, 2020
- Watanabe H, Ikeda M, Mori E. Logopenic progressive aphasia with neologisms: a case report. *BMC Neurol.*19(1):299, 2019 Nov 25
- Hatada Y, Hashimoto M, Shiraishi S, Ishikawa T, Fukuhara R, Yuki S, Tanaka H, Miyagawa Y, Kitajima M, Uetani H, Tsunoda N, Koyama A, Ikeda M. Cerebral Microbleeds Are Associated with Cerebral Hypoperfusion in Patients with Alzheimer's Disease. *J Alzheimers Dis.* 71(1):273-280, 2019 doi: 10.3233/JAD-190272.
- Chang YT, Kazui H, Ikeda M, Huang CW, Huang SH, Hsu SW, Chang WN, Chang CC. Genetic Interaction of APOE and FGF1 is Associated with Memory Impairment and Hippocampal Atrophy in Alzheimer's Disease. *Aging Dis.* 10(3):510-519, 2019 Jun 1 doi: 10.14336/AD.2018.0606. eCollection 2019 Jun.
- Morita K, Miura K, Fujimoto M, Yamamori H, Yasuda Y, Kudo N, Azechi H, Okada N, Koshiyama D, Shiino T, Fukunaga M, Watanabe Y, Ikeda M, Kasai K, Hashimoto R. Eye-movement characteristics of schizophrenia and their association with cortical thickness. *Psychiatry Clin Neurosci.* 73(8):508-509, 2019
- Suehiro T, Kazui H, Kanemoto H, Yoshiyama K, Sato S, Suzuki Y, Azuma S, Matsumoto T, Kishima H, Ishii K, Ikeda M. Changes in brain morphology in patients in the preclinical stage of idiopathic normal pressure hydrocephalus. *Psychogeriatrics.* 19(6):557-565, 2019
- Azuma S, Kazui H, Kanemoto H, Suzuki Y, Sato S, Suehiro T, Matsumoto T, Yoshiyama K, Kishima H, Shimosegawa E, Tanaka T, Ikeda M. Cerebral blood flow

and Alzheimer's disease-related biomarkers in cerebrospinal fluid in idiopathic normal pressure hydrocephalus. *Psychogeriatrics*.19(6):527-538, 2019

・ Hata M, Hayashi N, Ishii R, Canuet L, Pascual-Marqui RD, Aoki Y, Ikeda S, Sakamoto T, Iwata M, Kimura K, Iwase M, Ikeda M, Ito T. Short-term meditation modulates EEG activity in subjects with post-traumatic residual disabilities. *Clinical neurophysiology practice* 4 :30-36 2019

・ Hamauchi A, Hidaka Y, Kitamura I, Yatabe Y, Hashimoto M, Yonehara T, Fukuhara R, Ikeda M. Emergence of artistic talent in progressive nonfluent aphasia: a case report. *Psychogeriatrics*. 19(6):601-604, 2019

・ Morita K, Miura K, Fujimoto M, Yamamori H, Yasuda Y, Kudo N, Azechi H, Okada N, Koshiyama D, Ikeda M, Kasai K, Hashimoto R. Eye movement abnormalities and their association with cognitive impairments in schizophrenia. *Schizophr Res*. 209:255-262, 2019 Jul doi: 10.1016/j.schres.2018.12.051.

・ Aoki Y, Kazui H, Pascual-Marqui RD, Ishii R, Yoshiyama K, Kanemoto H, Suzuki Y, Sato S, Hata M, Canuet L, Iwase M, Ikeda M. EEG Resting-State Networks in Dementia with Lewy Bodies Associated with Clinical Symptoms. *Neuropsychobiology*.77(4):206-218, 2019

・ Chang YT, Mori E, Suzuki M, Ikeda M, Huang CW, Lee JJ, Chang WN, Chang CC. APOE-MS4A genetic interactions are associated with executive dysfunction and network abnormality in clinically mild Alzheimer's disease. *Neuroimage Clin*. 21:101621, 2019 doi: 10.1016/j.nicl.2018.101621.

・ Aoki Y, Kazui H, Pascual-Marqui RD, Ishii R, Yoshiyama K, Kanemoto H, Suzuki Y, Sato S, zuma S, Suehiro T, Matsumoto T, Hata M, Canuet L, wase M, Ikeda M. EEG Resting-State Networks Responsible for Gait Disturbance Features in Idiopathic Normal Pressure Hydrocephalus. *Clin EEG Neurosci*. 50(3):210-218, 2019 May doi: 10.1177/1550059418812156.

・ 数井裕光, 佐藤俊介, 吉山顕次, 小杉尚子, 野口代, 山中克夫, 池田学. 【将来の認知症医療を見据えて-診断・治療・社会的問題を問い直す-】治療 BPSD 治療を問う 新たな視点を交えて考える <オープンング> BPSD ケアの現状 認知症ちえのわ net からみえたこと(解説/特集). 老年精神医学雑誌 (0915-6305) 31 巻増刊 I : 78-83, 2020.

・ 池田学. 将来の認知症医療を見据えて これからの認知症医療を見えた諸課題. 老年精神医学雑誌 (0915-6305) 31 巻増刊 I : 46-52, 2020. 02

20)佐竹祐人, 佐藤俊介, 池田学. 臨床 障害 前頭側頭葉変性症. *Clinical neuroscience* (0289-0585) 38 (2) : 214-218, 2020.

・ 池田学. 超高齢社会と認知症(解説/特集). *臨床精神医学* (0300-032X) 49 (2) : 151-156, 2020. 02
22)清水秀明, 小森憲治郎, 豊田泰孝, 吉田卓, 越智紳一郎, 森崇明, 池田学. 常同行動に及ぼす意味記憶障害の影響について 意味性認知症例の行動観察より. *神経心理学* (0911-1085) 35 (4) : 225-237, 2019.

・ 数井裕光, 佐藤俊介, 吉山顕次, 小杉尚子, 池田学. 記憶障害におけるリハビリテーションの原点とトピック 認知症患者の記憶障害に対する適切な対応法 認知症ちえのわ net の結果から. 高次脳機能研究 (1348-4818) 39 (3) : 326-331, 2019.

・ 榎田道人, 渡辺宏久, 勝野雅央, 池田学, 祖父江元. FTL-D-J からみたわが国における前頭側頭型認知症の臨床特徴. 老年精神医学雑誌 (0915-6305) 30 (10) : 1107-1113, 2019.

・ 佐藤俊介, 森康治, 池田学. 前頭側頭葉変性症の概念・分類の変遷. 老年精神医学雑誌 (0915-6305) 30 (10) : 1073-1079, 2019.

・ 池田学. 認知症の分類. *Rad Fan* (1348-3498) 17 (13) : 10-12, 2019.

・ 長瀬亜岐, 堀田牧, 池田学. 糖尿病外来受診者と認知障害. 老年精神医学雑誌 (0915-6305). 30 (9) : 1014-1020, 2019. 09

・ 吉山顕次, 池田学. リハビリテーション医療に必要な薬物治療(第9回) 認知症. 総合リハビリテーション (0386-9822). 47 (9) : 913-917, 2019.

・ 佐藤俊介, 池田学. 【精神科診療マニュアル】認知症 前頭側頭型認知症. *精神科* (1347-4790) 35 巻 Suppl. 1 : 237-244, 2019.

・ 池田学. 第20回感情・行動・認知(ABC)研究会 前頭側頭葉変性症, タウオパチーにおける行動障害と精神症状. *分子精神医学* (1345-9082) 19 (3) : 166-169, 2019.

・ 佐竹祐人, 森康治, 佐藤俊介, 繁信和恵, 森悦朗, 池田学. 複数の医療施設を経由し, スムーズに福祉施設入所につながられた前頭側頭型認知症の一例. *精神科治療学* (0912-1862) 3 (6) : 691-697, 2019.

- ・吉山顕次, 池田学. 専攻医として身に着けるべき認知症(BPSD 含む)の薬物療法. 臨床精神薬理 (1343-3474) 22 (5) : 495-501, 2019. 05
- 34)近江翼, 池田学. 婦人科編 術後合併症への対応法 せん妄. 臨床婦人科産科 (0386-9865) 73 (4) : 138-143, 2019.
- ・青木保典, 石井良平, 畑真弘, 池田俊一郎, 岩瀬真生, 池田学. 認知症に対する脳波研究の重要性と脳波解析手法の進歩. 老年精神医学雑誌 30 (7) : 773-777, 2019.
- ・畑真弘, 石井良平, 青木保典, 池田俊一郎, 池田学. 【臨床神経生理学が精神疾患の治療において果たす役割-update-】 認知症疾患への臨床神経生理学の応用. 臨床神経生理学 47(3) : 149-154, 2019.
- ・粟田圭一. 超高齢期の認知症の疫学と社会状況. 老年精神医学雑誌 30 : 238-244, 2019
- ・粟田圭一. 高齢者のメンタルヘルス, 特集にあたって. 精神医学 61 : 3-4, 2019
- ・粟田圭一. 認知症や高齢者精神疾患の特徴と地域の特性に応じた総合支援体制. ファルマシア : 5(9). 864-868, 2019
- ・粟田圭一. これからの認知症施策が向かうべき方向性について. 認知症の最新医療 35 : 186-189, 2019
- ・粟田圭一. 主治医からの提言. これだけは知りたい認知症画像診断. 臨床画像 35 : 1215-1222, 2019
- 6) 粟田圭一. 認知症とともに暮らせる社会をめざして. 大都市の認知症高齢者生活実態調査を通して. 日本マンション学会誌マンション学 64 : 89-91, 2019
- ・粟田圭一. 今日の認知症施策に関するいくつかの課題. 老年精神医学雑誌 30 : 1379-1384, 2019
- Makizako H.** Frailty and Sarcopenia as a Geriatric Syndrome in Community-Dwelling Older Adults. *Int J Environ Res Public Health* 19, 16(20). pii:E4013, 2019.
- ・村山明彦, 山口智晴, 宮寺亮輔, 柴ひとみ, 田口敦彦. 『心・身・脳』維持向上プロジェクトの活動報告-大学・社会福祉協議会・参加者とで作る新しい介護予防プログラム-. 理学療法群馬 30: 39-42, 2019.
- ・悴田敦子, 宮寺亮輔, 山口智晴. 認知機能のリハビリ・ケア. リハージュ「なるほど! 認知症のリハビリ・ケア」(QOL サービス出版部編). QOL サービス, 広島, p11-56, 2020.
- ・山口智晴. 在宅での認知症悪化とニーズの対応方法・連携, 在宅での困りごと・ニーズの対応方法・連携. 認知症対応力アップマニュアル(内田陽子編). 照林社, 東京, p133-144, 2020.
- ・Saito Y, Tomori K, Nagayama H, Sawadai T, Kikuchi E. Differences in the occupational therapy goals of clients and therapists affect the outcomes of patients in subacute rehabilitation wards: a case-control study. *J Phys Ther Sci.* 31(7):521–525, 2019 doi:10.1589/jpts.31.521
- ・Saito Y, Tomori K, Sawada T, et al. Determining whether occupational therapy goals match between pairs of occupational therapists and their clients: a cross-sectional study [published online ahead of print, 2019 Jul 28]. *Disabil Rehabil* :1–6, 2019 doi:10.1080/09638288.2019.1643417
- ・Ishimaru D, Tanaka H, Nagata Y, Nishikawa T: Physical Activity in Severe Dementia is Associated with Agitation Rather than Cognitive Function" *American Journal of Alzheimers Disease & Other Dementias*, 1533317519871397. (2019).
- ・Tanaka H, Nagata Y, Ishimaru D, Ogawa Y, Fukuhara K: Clinical factors associated with Activities of Daily Living and their decline in patients with severe and profound dementia. *Psychogeriatrics*, doi: 10.1111/psyg.12502. (2019).
- ・田中寛之, 永田優馬, 石丸大貴, 日垣一男, 西川 隆. ライフヒストリーカルテの導入が医療介護職員の患者・利用者理解度に与えた影響 38(4):405-415. 2019
- ・石丸大貴, 田中寛之: 地域で継続して生活するために 認知症高齢者の睡眠, 生活リズムに対する評価と介入. 作業療法ジャーナル 53(11):1148-1152, 2019
- ・石丸大貴, 田中寛之, 永田優馬, 西川 隆. 認知症における engagement 評価尺度; 日本語版 Menorah Park Engagement Scale の臨床的有用性の検討. 老年精神医学雑誌, 31(3): 304-310, 2020
- ・永田優馬, 田中寛之, 石丸大貴, 西川 隆. 重度認知症者のための QoL 尺度 (Quality of Life in Late Stage Dementia 日本語版: QUALID-J)の因子構造に関する研究. 老年精神医学雑誌, 31(6): 643-651, 2020
- ・丸田道雄, 田平隆行, 佐賀里昭, 宮田浩紀, 堀田牧, 吉満孝二, 韓允熙, 高橋弘樹, 川越雅弘. BPSD 関連項目に該当する要支援高齢者の介護度悪化に関わる要因. 保健医療学雑誌 10 (1) : 19-26, 2019

・吉満孝二, 千種芳幸, 平嶋佑太郎, 丸田道雄. 貯痰時に副雑音に含まれる特徴量の解析. 鹿児島大学医学部保健学科紀要 30 (1) : 9-14, 2020

・ Tabira T, Maruta M, Matsudaira K, Matsuo T, Hasegawa T, Sagari A, Han G, Takahashi H, Tayama J: Relationship between attention bias and psychological index in individuals with chronic low back pain: A preliminary event-related potential study. *Front Hum Neurosci*, 26, 2020. doi: 10.3389/fnhum.2020.561726

・ Ikeda Y, Han G, Maruta M, Hotta M, Ueno E, Tabira T: Association between Daily Activities and Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia in Community-Dwelling Older Adults with Memory Complaints by Their Families. *Int. J. Environ Res Public Health*, 17(18), 6831 2020 .doi: 10.3390/ijerph17186831

・ Tokuda K, Maruta M, Shimokihara S, Han G, Tomori K, Tabira T. Self-Selection of Interesting Occupation Facilitates Cognitive Response to the Task: An Event-Related Potential Study. *Front Hum Neurosci*, 14:299, 2020. doi: 10.3389/fnhum.2020.00299. eCollection 2020.

・ Han G, Maruta M, Ikeda Y, Ishikawa T, Tanaka H, Koyama A, Fukuhara R, Boku S, Takebayashi M, Tabira T: Relationship between Performance on the Mini-Mental State Examination Sub-Items and Activities of Daily Living in Patients with Alzheimer's Disease. *J Clin Med* 9(5):1537, 2020 doi: 10.3390/jcm9051537.

・ Sagari, A, Tabira, T, Maruta, M, Miyata, H, Han, G, Kawagoe, M: Causes of changes in basic activities of daily living in older adults with long-term care needs. *Australas J Ageing*: 1– 8, 2020 doi.org/10.1111/ajag.12848

・ Maruta M, Makizako H, Ikeda Y, Miyata H, Nakamura A, Han G, Shimokihara S, Tokuda, K, Kubozono T, Ohishi M, Tomori K, Tabira T: Associations between Depressive Symptoms and Satisfaction with Meaningful Activities in Community-Dwelling Japanese Older Adults. *J Clin Med*, 9(3), 795, 2020 doi: 10.3390/jcm9030795.

・ Shimokihara S, Tanoue T, Takeshita K, Tokuda K, Maruta M, Moriuchi T, Tabira T: Usefulness of navigation application for outdoor mobility guides in community-dwelling older adults: a preliminary study. *Disability and Rehabilitation: Assistive Technology*, 16, 2020. doi.org/10.1080/17483107.2020.1870005

・ Tanaka H, Umeda R, Shoumura Y, Kurogi T, Nagata Y, Ishimaru D, Tabira T, Yoshimitsu K, Ishi R, Nishikawa T: Development of an Assessment Scale for Engagement in Activities for Patients with Moderate to Severe dementia.

Psychogeriatrics, 2021 doi: 10.1111/psyg.12678.

・ Shimokihara S, Maruta M, Hidaka Y, Akasaki Y, Tokuda K, Han G, Ikeda Y, Tabira T: Relationship of Decrease in Frequency of Socialization to Daily Life, Social Life and Physical Function in Community-Dwelling Adults Aged 60 and over after the COVID-19 Pandemic. *Int. J. Environ. Res. Public Health*18(5), 2573, 2021 doi.org/10.3390/ijerph18052573

・ Maruta M, Makizako H, Ikeda Y, Miyata H, Nakamura A, Han G, Shimokihara S, Tokuda, K, Kubozono T, Ohishi M, Tabira T: Association between apathy and satisfaction with meaningful activities in older adults with mild cognitive impairment: A population-based cross-sectional study. *Int J Geriatr Psychiatry*, 2021.doi: 10.1002/gps.5544

・ Sakuta S, Hashimoto M, Ikeda M, Koyama A, Takasaki A, Hotta M, Fukuhara R, Ishikawa T, Yuki S, Miyagawa Y, Hidaka Y, Kaneda K, Takebayashi M. Clinical features of behavioral symptoms in patients with semantic dementia: Does semantic dementia cause autistic traits? *PLOS ONE* <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0247184> February 18, 2021

2) Hashimoto M, Suzuki M, Hotta M, Nagase A, Yamamoto Y, Hirakawa N, Satake Y, Nagata Y, Suehiro T, Kanemoto H, Yoshiyama K, Mori E, Ikeda M. The influence of the COVID-19 outbreak on the lifestyle of older patients with dementia or mild cognitive impairment. *Frontiers in psychiatry*11 :570580, 2020

・ Awata S, Edahiro A, Arai T, Ikeda M, Ikeuchi T, Kawakatsu S, Konagaya Y, Miyanaga K, Ota H, Suzuki K, Tanimukai S, Utsumi K, Kakuma T. Prevalence and subtype distribution of early-onset dementia in Japan. *Psychogeriatrics*. 2020 Nov, 20:817-823. doi: 10.1111/psyg.12596.

・ Sano M, Lapid M, Ikeda M, Mateos R, Wang H, Reichman WE. *Psychogeriatrics in a World with COVID-19*. *Int Psychogeriatr*. 2020 Oct, 32:1101-1105 doi:10.1017/S104161022000126X.

・ Suzuki M, Hotta M, Nagase A, Yamamoto Y, Hirakawa N, Satake Y, Nagata Y, Suehiro T, Kanemoto H, Yoshiyama K, Mori E, Hashimoto M, Ikeda M. The behavioral pattern of patients with frontotemporal dementia during the COVID-19 pandemic. *Int Psychogeriatr*. 2020 Oct. 32:1231-1234 doi: 10.1017/S104161022000109X.

・ Hwang TJ, Rabheru K, Peisah C, Reichman W, Ikeda M. Loneliness and social isolation during the COVID-19 pandemic. *Int Psychogeriatr*. 2020 Oct, 32:1217-1220 doi: 10.1017/S1041610220000988.

• Kawabe Y, Mori K, Yamashita T, Gotoh S, Ikeda M. The RNA exosome complex degrades expanded hexanucleotide repeat RNA in C9orf72 FTL/ALS. *EMBO J*. 2020 Aug 24:e102 700. doi: 10.15252/embj.2019102700.

• Aoki Y, Kazui H, Bruña R, Pascual-Marqui RD, Yoshiyama K, Wada T, Kanemoto H, Suzuki Y, Suehiro T, Matsumoto T, Kakeda K, Hata M, Canuet L, Ishii R, Iwase M, Ikeda M. Normalized power variance of eLORETA at high-convexity area predicts shunt response in idiopathic normal pressure hydrocephalus. *Sci Rep*. 2020 Aug 3;10(1):13054. doi:10.1038/s41598-020-70035-9

• Kawakami I, Arai T, Shinagawa S, Niizato K, Oshima K, Ikeda M. Distinct early symptoms in neuropathologically proven frontotemporal lobar degeneration. *Int J Geriatr Psychiatry*. 2020 Aug 3. doi: 10.1002/gps.5387. Online ahead of print.

• Kanemoto H, Kazui H, Adachi H, Yoshiyama K, Wada T, Nomura KT, Shimosegawa E, Ikeda M. Thalamic pulvinar metabolism, sleep disturbances, and hallucinations in dementia with Lewy bodies: Positron emission tomography and actigraphy study. *Int J Geriatr Psychiatry*. 2020 Aug;35(8):934-943. doi: 10.1002/gps.5315. Epub 2020

• Watanabe H, Ikeda M, Mori E. Non-fluent/Agrammatic Variant of Primary Progressive Aphasia with Generalized Auditory Agnosia. *Front Neurol*, Jun 26;11:519. doi: 10.3389/fneur.2020.00519. eCollection 2020.PMID: 32676050

• Ducharne S, Dols A, Laforce R, Devenney E, Kumfor F, van den Stock J, Dallaire-Théroux C, Seelaar H, Gossink F, Vijverberg E, Huey E, Vandenbulcke M, Masellis M, Trieu C, Onyike C, Caramelli P, de Souza LC, Santillo A, Waldö ML, Landin-Romero R, Piguet O, Kelso W, Eratne D, Velakoulis D, Ikeda M, Perry D, Pressman P, Boeve B, Vandenberghe R, Mendez M, Azuar C, Levy R, Le Ber I, Baez S, Lerner A, Ellayosyula R, Pasquier F, Galimberti D, Scarpini E, van Swieten J, Hornberger M, Rosen H, Hodges J, Diehl-Schmid J, Pijnenburg Y. Recommendations to distinguish behavioural variant frontotemporal dementia from psychiatric disorders. *Brain*. 2020 Jun 1; 143 (6):1632-1650 doi: 10.1093/brain/awaa018.

• McKeith IG, Ferman TJ, Thomas AJ, Blanc F, Boeve BF, Fujishiro H, Kantarci K, Muscio C, O'Brien JT, Postuma RB, Aarsland D, Ballard C, Bonanni L, Donaghy P, Emre M, Galvin JE, Galasko D, Goldman JG, Gomperts SN, Honig LS, Ikeda M, Leverenz JB, Lewis SJG, Marder KS, Masellis M, Salmon DP, Taylor JP, Tsuang DW, Walker Z, Tiraboschi P. Research criteria for the diagnosis of

prodromal dementia with Lewy bodies. *Neurology* 2020 Apr;94(17):743-755 doi: 10.1212/WNL.0000000000009323.

• Ikezaki H, Hashimoto M, Ishikawa T, Fukuhara R, Tanaka H, Yuki S, Kuribayashi K, Hotta M, Koyama A, Ikeda M, Takebayashi M. Relationship between executive dysfunction and neuropsychiatric symptoms and impaired instrumental activities of daily living among patients with very mild Alzheimer's disease. *Int J Geriatr Psychiatry*. 2020 Aug;35(8):877-887. doi: 10.1002

• 宗久美, 石川智久, 井上靖子, 藤瀬隆司, 中村光成, 丸山貴志, 橋本衛, 池田学, 竹林実, 王丸道夫. 複合慢性疾患連携パスの開発を目指した熊本県荒尾市における医療介護連携の促進 日本認知症ケア会誌 19(4):688-694, 2021

• 田中響, 橋本衛, 竹林実, 池田学. アルツハイマー病における Short-Memory Questionnaire (SMQ) の有効性. 老年精神医学雑誌 31(10):1089-1098, 2020

• 高崎昭博, 橋本衛, 福原竜治, 石川智久, 小山明日香, 宮川雄介, 佐久田静, 本堀伸, 一美奈緒子, 堀田牧, 津野田尚子, 兼田桂一郎, 品川俊一郎, 池田学, 竹林実. 意味性認知症患者の自動車運転中止をめぐる状況と対応に関する一考. *Dementia Japan* 34(10): 295-304, 2020

• 橋本衛, 鈴木麻希, 池田学. コロナ蔓延(自粛生活)と認知症 臨床精神医学 49(9), 1551-1556, 2020

• 末廣聖, 池田学. 認知症と高齢者精神疾患. 臨床と研究 92(9): 1111-1116, 2020

• 梅田寿美代, 鐘本英輝, 池田学. うつ病と認知症の関係 (1) 認知症専門医の立場から. *Pharma Medica* 38(8): 9-13, 2020

• 佐藤俊介, 鐘本英輝, 池田学. 精神科臨床評価マニュアル [改訂版]. 臨床精神医学 49(8):1212-1218, 2020

• 森康治, 佐藤俊介, 宮脇英子, 池田学. 前頭側頭葉変性症への対応と支援. *BRAIN and NERVE* 72(6):623-632, 2020

• 池田学, 森悦朗. 真のエンドポイントに近づくためにはどうすべきか? : 認知症. 臨床精神薬理 23(5): 517-522, 2020

• 池田学. 地域社会における認知症の症状への対応の整理と公開. 老年精神医学雑誌 31(4):329-337,

2020

- ・村山明彦, 山口智晴. 【認知症ケアのプラットフォーム】 バリテーションとユマニチュード. 総合リハビリテーション 48(10): 933-938, 2020.
 - ・村山明彦, 山口智晴. 骨粗鬆症を呈する認知症者の転倒・骨折 公表された既存データの二次分析より. 理学療法群馬 (31): 13-16, 2020.
 - ・山口智晴. 在宅での認知症悪化とニーズの対応方法・連携, 在宅での困りごと・ニーズの対応方法・連携. 認知症対応力アップマニュアル (内田陽子編). 照林社, 東京, p133-144, 2020.
 - ・Ohno K, Tomori K, et al. Systematic review of the Measurement Properties of the Canadian Occupational Performance Measure. American Journal of Occupational Therapy, 2020 (in press)
 - ・Sawada T, Tomori K, et al. Routine use proportion and determining factors of the Canadian Occupational Performance Measure in the real-world setting: A retrospective cross-sectional study in Japan. British Journal of Occupational Therapy, 2020 (in press).
 - ・Strubbia C, Tomori K, et al. Use of technology in supporting goal setting in rehabilitation for adults: a scoping review. Bmj Open 10, e041730, 2020.
 - ・友利幸之介. 目標設定 up-to-date. 臨床作業療法 NOVA 17(2): 9-16, 2020.
 - ・石川哲也, 友利幸之介 他. 入院患者に対して作業選択意思決定支援ソフト (Aid for Decision-making in Occupation Choice)を用いた目標設定の可否に関する後方視的研究. 日本臨床作業療法研究 7: 46-51, 2020.
 - ・Tamaru Y, Tanaka H, Ueda M, Sumino H, Imaoka M, Matsugi A, Nishikawa T, Naito Y: Effect of Alzheimer's disease severity on upper limb function. Psychogeriatrics, 20(5): 802-804, 2020
 - ・Tanaka H, Nagata Y, Ishimaru D, Ogawa Y, Fukuhara K, Nishikawa T: Possibility of Cognitive improvement in Severe Dementia: A Case Series assessed by Cognitive Test for Severe Dementia. International Journal of Gerontology, in press.
 - ・Ishimaru D, Tanaka H, Nagata Y, Fukuhara K, Ogawa Y, Takabatake S, Nishikawa T: Impact of disturbed rest-activity rhythms on activities of daily living in moderate and severe dementia patients. Alzheimer Disease & Associated Disorders an International Journal, inpress.
 - ・Leung S, Tanaka H, Kwok T: Development of Chinese Version of Quality of Life in Late-Stage Dementia and Cognitive test for Severe Dementia. Dementia and Geriatric Cognitive Disorder Extra, 10(3):172-181, (2020). doi: 10.1159/000511703.
 - ・Tanaka H, Umeda R, Shoumura Y, Kurogi T, Nagata Y, Ishimaru D, Tabira T, Yoshimitsu K, Ishi R, Nishikawa T: Development of an Assessment Scale for Engagement in Activities for Patients with Moderate to Severe dementia. Psychogeriatrics, inpress.
 - ・Yahara M, Kazuyuki N, Ueno K, Okamoto M, Okuda T, Tanaka H, Naito Y, Ishii R, Ueda M, Ito T. : Remote reminiscence using immersive virtual reality may be efficacious for reducing anxiety in patients with mild cognitive impairment even in COVID-19 pandemic: A case report, in press.
 - ・吉満孝二, 浜田利満, 藤田賢太郎, 西綾, 福永一喜, 認知症高齢者とのコミュニケーションを支援する表情解析技術の検討. 日本ヒューマンケア・ネットワーク学会誌 18(1): 100-108, 2020.
 - ・吉満孝二, 千種芳幸, 平嶋佑太郎, 丸田道雄: 貯痰時に副雑音に含まれる特徴量の解析. 鹿児島大学医学部保健学科紀要 30 (1) : 9-14, 2020.
- ## 2. 学会発表
- ・田平隆行, 池田由里子, 丸田道雄, 小川敬之, 石川智久, 吉浦和宏, 韓侑熙, 堀田牧, 池田学: 生活行為工程分析表に基づいた地域在住 AD 患者の ADL 工程障害と残存の特徴. 第 34 回日本老年精神医学会学術集会, 2019 年 6 月 (仙台)
 - ・丸田道雄, 田平隆行, 吉満孝二, 佐賀里昭, 宮田浩紀, 韓侑熙, 吉浦和宏, 大勝秀樹, 川越雅弘: 介護認定調査に基づいた要介護度と生活機能への通所リハビリテーションの効果一傾向スコアマッチングを用いた後方視的研究一. 第 34 回日本老年精神医学会学術集会, 2019 年 6 月 (仙台)
 - ・丸田道雄, 田平隆行, 佐賀里昭, 大勝秀樹, 川越雅弘: 介護認定調査における視力・聴力の低下が認知機能低下リスクへ与える影響. 第 53 回日本作業療法学会, 2019 年 9 月 (福岡)
 - ・佐賀里昭, 田平隆行, 丸田道雄, 宮田浩紀, 川越雅弘: 要支援・要介護高齢者の生活行為の経年変化. 第 53 回日本作業療法学会, 2019 年 9 月 (福岡)
 - ・池田由里子, 吉満孝二, 丸田道雄, 平田優, 田平隆行: もの忘れを自覚する地域在住高齢者の加齢に

よる生活行為の特徴に関する検討. 第 53 回日本作業療法学会, 2019 年 9 月 (福岡)

・田平隆行, 丸田道雄, 佐賀里昭, 宮田浩紀, 川越雅弘: 地域在住認知症高齢者における 3 年後の介護認定変化に及ぼす心身機能, 生活行為, 行動心理症状の要因に関する縦断研究. 第 53 回日本作業療法学会, 2019 年 9 月 (福岡)

・吉満孝二, 藤田賢太郎, 西 綾, 福永一喜, 田平隆行: 介護ロボット開発の取り組み—認知症高齢者のコミュニケーション支援—. 第 53 回日本作業療法学会, 2019 年 9 月 (福岡)

・宮田浩紀, 丸田道雄, 佐賀里昭, 田平隆行, 川越雅弘: 介護保険施設入居者における 3 年後の介護認定変化に及ぼす心身機能及び起居動作の要因. 第 53 回日本作業療法学会, 2019 年 9 月 (福岡)

・田中有貴, 藤田賢太郎, 吉満孝二, 田平隆行, 大勝秀樹: 最新の表情解析技術を用いた認知症高齢者の表情解析の実用化に向けた予備的研究. 第 53 回日本作業療法学会, 2019 年 9 月 (福岡)

・韓侑熙, 丸田道雄, 池田由里子, 小山明日香, 田中響, 石川智久, 福原竜治, 橋本衛, 竹林実, 田平隆行: レビー小体型認知症の認知機能と日常生活活動についてのアルツハイマー病との比較: 第 13 回日本作業療法研究学会, 2019 年 11 月 (鹿児島)

・下木原俊, 田之上友彦, 徳田圭一郎, 丸田道雄, 日高雄磨, 田平隆行: 地域在住高齢者に対する屋外移動ガイドを目的としたナビゲーションアプリの有用性に関する予備的研究. 第 13 回日本作業療法研究学会, 2019 年 11 月 (鹿児島)

・池田由里子, 韓侑熙, 丸田道雄, 田平隆行: 主観的もの忘れのある地域在住高齢者の趣味活動と生活行為の関連性. 第 13 回日本作業療法研究学会, 2019 年 11 月 (鹿児島)

・Abe K, Makizako H, Tabira T, Kubozono T, Takenaka T, Kuwahata S, Ohishi M. Attitude towards death and depression among community-dwelling older adults in Japan. 11th IAGG Asia/Oceania Regional Congress, 2019 年 10 月 (Taipei, Taiwan)

・栗田圭一. 認知症ケアを受ける人の権利について考えたことはありますか. 第 20 回日本認知症ケア学会, 2019.5.25-5.26, 京都 (教育講演)

・栗田圭一. 希望と尊厳をもって暮らせる社会をめざして. 第34回日本老年精神医学会, 2019.6.6-6.8, 仙台 (大会長講演)

・栗田圭一. 認知症医療における患者中心の医療とは. 第30回日本老年医学会東海地方会, 2019.10.5, 名古屋 (教育講演)

・Makizako H. Social Frailty and Its Impact on Disability. 5th Asian Conference For Frailty and Sarcopenia, Taipei, 2019 年 10 月 22 日.

・牧迫飛雄馬. 認知症とフレイルの社会的側面 (日本サルコペニア・フレイル学会合同シンポジウム). 第 38 回日本認知症学会学術集会, 東京, 2019 年 11 月 7 日.

・山口智晴. 群馬県内における認知症初期集中支援チームの実態と課題. 第 38 回日本認知症学会学術集会, 東京, 11 月 7-9 日, 2019

・宮寺亮輔, 山口智晴, 村山明彦. 介護レクリエーション支援機器コグニマスターの現場活用に向けた効果検証. 第 53 回日本作業療法学会, 福岡, 9 月 6-8 日, 2019

・Nagata Y, Tanaka H, Ishimaru D, Nishikawa T: Factors of Quality of Life in Severe Dementia. 13 th International Society of Physical and Rehabilitation Medicine World Congress (2019, 6) Kobe

・Ishimaru D, Tanaka H, Nagata Y, Nishikawa T: Associations of amount of physical activity with cognitive function, activities of daily living, and behavioral and psychological symptoms of dementia in severe dementia 13 th International Society of Physical and Rehabilitation Medicine World Congress (2019, 6) Kobe

・Tanaka H, Nagata Y, Ishimaru D, Nishikawa T: What are effective ways to maintain cognitive abilities of people with severe dementia? -results of a one-year follow up using the cognitive test for severe dementia-. 13 th International Society of Physical and Rehabilitation Medicine World Congress (2019, 6) Kobe

・田中寛之, 永田優馬, 石丸大貴, 西川隆. 最重度認知症まで認知機能障害と ADL は強く関連する. 第 34 回日本老年精神医学学会 (2019, 6) 仙台

・田中寛之, 永田優馬, 石丸大貴, 西川隆. 作業療法士は認知症を診ることができるか -パーソンセンタードケア理解度の調査から得られた結果- 第 53 回日本作業療法学会 (2019, 9) 福岡

・永田優馬, 田中寛之, 石丸大貴, 西川隆. 重度認知症における BPSD の分類-QoL との関連性. 第 53 回日本作業療法学会 (2019, 9) 福岡

・小山明日香, 橋本衛, 福原竜治, 石川智久, 松下正輝, 高崎昭博, 勝屋朗子, 福田瑛, 井上麻衣, 吉浦和宏, 竹林実. 認知症スクリーニングのための Serial-7 課題の実施方法に関する研究. 老年精神医学会, 仙台 6 月 6-8 日, 2019

・平嶋佑太郎, 吉満孝二, 西綾, 平川智士, 萩原隆二. 病院・施設における喀痰吸引業務の実態と負担感に関する調査, 第 53 回日本作業療法学会, 2019 年 9 月 (福岡)

・西綾, 吉満孝二, 藤田賢太郎, 福永一喜, 池田由里子. 認知症高齢者のコミュニケーション支援に関する介護ロボットの検討～ニーズ調査, 第 53 回日本作業療法学会, 2019 年 9 月 (福岡)

・藤田賢太郎, 溝口諒, 吉満孝二, 植村健一, 竹田寛. ICT を活用した島しょ部との連携システムの構築 (第二報), 第 53 回日本作業療法学会, 2019 年 9 月 (福岡)

・吉満孝二, 藤田賢太郎, 福永一喜, 田中有貴, 青木孝之, 浜田利満. 最新の表情解析技術を用いた認知症高齢者とのコミュニケーションの可能性, 第 20 回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会, 2019 年 12 月 (香川)

・田平隆行, 池田由里子, 丸田道雄, 日高憲太郎, 韓 旻熙, 吉浦和宏, 石川智久, 堀田牧, 池田学: 地域在住認知症高齢者における IADL 工程障害の居住形態による相違, 第 35 回日本老年精神医学会, 2020 年 12 月 (米子, 誌上発表)

・韓 旻熙, 福原竜治, 竹林実, 丸田道雄, 中村篤, 宮田浩紀, 下木原俊, 徳田圭一郎, 池田由里子, 田平隆行: アルツハイマー病患者の行動心理症状と日常生活活動との関連についての研究. 第 14 回日本作業療法研究学会, 2020 年 11 月 (Web)

・丸田道雄, 牧迫飛雄馬, 池田由里子, 韓 旻熙, 中村篤, 宮田浩紀, 下木原俊, 大勝巖, 大勝秀樹, 田平隆行: 地域在住高齢者が重要とする活動の満足度と抑うつ症状の関連. 第 14 回日本作業療法研究学会, 2020 年 11 月 (Web)

・赤井田将真, 牧迫飛雄馬, 中井雄貴, 富岡一俊, 谷口善昭, 和田あゆみ, 佐藤菜々, 丸田道雄, 田平隆行: 地域在住高齢者における意味のある活動の満

足度とフレイルの関係. 第 14 回日本作業療法研究学会, 2020 年 11 月 (Web)

・宮田浩紀, 丸田道雄, 中村篤, 韓 旻熙, 池田由里子, 下木原俊, 徳田敬一郎, 赤崎義彦, 日高雄磨, 田平隆行: 高齢化率 40% を超える地域における社会的フレイルの有病率と重要な作業の特徴. 第 14 回日本作業療法研究学会, 2020 年 11 月 (Web)

・中村篤, 牧迫飛雄馬, 丸田道雄, 宮田浩紀, 田平隆行: 運転を中断した地域在住高齢者の生活上重要な作業の特徴および抑うつとの関連. 第 54 回日本作業療法学会. 2020 年 9 月 (web)

・丸田道雄, 牧迫飛雄馬, 中村篤, 大勝秀樹, 田平隆行: フレイル状態の地域在住高齢者が生活の中で重要とする活動の特徴. 第 54 回日本作業療法学会. 2020 年 9 月 (web)

・池田由里子, 丸田道雄, 平田優, 田平隆行: 家族が捉えているもの忘れがある地域在住高齢者の IADL と BPSD の特徴. 第 54 回日本作業療法学会. 2020 年 9 月 (web)

・田平隆行, 丸田道雄, 韓 旻熙, 岡部拓大, 川越雅弘: 認知症高齢者の要介護度に伴う ADL 自立度の低下様式. 第 54 回日本作業療法学会. 2020 年 9 月 (web)

・宮田浩紀, 丸田道雄, 中村篤, 池田由里子, 田平隆行: 地域在住高齢者の生活上重要な作業活動の満足度と社会的フレイルとの関連. 第 54 回日本作業療法学会. 2020 年 9 月 (web)

・上野恵理, 池田由里子, 下木原俊, 日高憲太郎, 田平隆行: 地域在住認知症高齢者における生活行為工程分析表 (PADA-D) を用いた更衣, 整容に関する特徴. 第 54 回日本作業療法学会. 2020 年 9 月 (web)

・下木原俊, 丸田道雄, 中村篤, 池田由里子, 田平隆行: 地域在住高齢者が生活の中で重要としている作業の特徴—性別および年代別の検討—. 第 54 回日本作業療法学会. 2020 年 9 月 (web)

・韓 旻熙, 福原竜治, 朴秀賢, 竹林実, 田平隆行: レビー小体型認知症患者の MMSE の下位項目と ADL との関連についての研究. 第 54 回日本作業療法学会. 2020 年 9 月 (web)

・岡部拓大, 鈴木誠, 磯直樹, 田平隆行, 川越雅弘: 生活自立確率の長期的変化—要介護高齢者を対象にした項目反応理論解析—. 第 54 回日本作業療法学会. 2020 年 9 月 (web)

・磯直樹, 岡部拓大, 鈴木誠, 田平隆行, 川越雅弘: 訪問リハビリテーションを利用した要介護者の心身機能を含めた生活機能の経時的変化. 第54回日本作業療法学会. 2020年9月(web)

・ Ikeda M. Japanese Frontotemporal Dementia Consortium 12th International Conference on Frontotemporal Dementias 3-5 March, 2021(Online)

・ Satake Y, Nagata Y, Suzuki M, Hashimoto M, Ikeda M. Psychiatry in the 20-20's: What will change? EFPT 2020 VIRTUAL FORUM, Bucharest, Roumania, 7.1-5,2020. (Online)

・ Kazui H, Sato S, Yoshiyama K, Kanemoto H, Kosugi N, Ikeda M. Success rate of various countermeasures against behavioral psychological symptoms of dementia based on the accumulation of real-world experience International Psychogeriatric Association 2020 Virtual congress, 2020.10.2-3, (Online)

・村山明彦, 山口智晴. 地域在住高齢者の主体的なフレイル予防活動を支援するための教材(実践編DVD)の紹介. 第7回日本予防理学療法学会学術大会, WEB, 9月20-26日, 2020

・梅田 錬, 田中寛之, 正村優子, 黒木達成: 認知症患者の活動に対する取り組み方評価尺度の開発(第二報). 第53回日本作業療法学会(2019,9) 福岡

・石丸大貴, 田中寛之, 永田優馬, 西川 隆: 日本語版 Menorah Park Engagement Scale の開発と臨床的有用性の検討 —認知症者における engagement 評価スケールの導入—. 第54回日本作業療法学会(2020,10) 新潟

・徳丸 愛, 浅田 望, 尾崎由唯, 田中寛之: 活動に対する取り組み方が BPSD の改善に及ぼす影響—回想法の実践を通して—. 第54回日本作業療法学会(2020,10) 新潟

・岡本美緒, 仁木一順, 矢原恵美, 上野慶太, 田中寛之, 野村麻衣, 吉田啓太, 奥田赳視, 内藤泰男, 石井良平, 上田幹子, 伊藤壽記: 認知機能低下・BPSDの抑制を実現しうる新規デジタルセラピューティクス開発に向けた予備的検討〜VRの医療応用〜. 第30回日本医療薬学会(2020,10) 名古屋.

・田中寛之, 永田優馬, 石丸大貴, 西川 隆: 重度認知症者における食事自立度に寄与する因子の検討. 第35回日本老年精神医学学会(2020,1) 鳥取.(オンライン)

・津野田 尚子, 石川 智久, 小山 明日香, 福原 竜治, 宮川 雄介, 吉浦 和宏, 橋本 衛, 竹林 実. 大規模認知症コホート研究 荒尾サイトMRIを用いた地域高齢者の脳小血管病変の検討. 第39回日本認知症学会学術集会, 令和2年11月26-28日

・日高 洋介, 津野田 尚子, 石川 智久, 小山 明日香, 福原 竜治, 宮川 雄介, 吉浦 和宏, 橋本 衛, 竹林 実. 大規模認知症コホート研究 荒尾サイト頭部MRIを用いた地域高齢者のiNPHの検討. 第39回日本認知症学会学術集会, 令和2年11月26-28日

・一木崇弘, 石川智久, 江田由美子, 松下早代, 吉浦和宏, 小山明日香, 朴 秀賢, 竹林 実. 熊本大学病院における精神科コンサルテーション・リエゾン活動の実践と課題. 第33回日本総合病院精神医学会総会, 令和2年12月7-13日

・藤田賢太郎, 吉満孝二, 福永一喜, 田中有貴, 青木孝之, 浜田利満, 台所の火事インシデントを防ぐ介護ロボットの開発について, 第54回日本作業療法学会, 2020年9月(新潟/WEB)

・吉満孝二, 藤田賢太郎, 福永一喜, 坂下寛志, 平嶋佑太郎. 在宅高齢者のリスク管理に関する調査 -介護ロボットのニーズ調査として-. 第54回日本作業療法学会, 2020年9月(新潟/WEB)

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
なし

2. 実用登録新案
なし

3. その他
なし